

金井延とフェノロサ 史料紹介を兼ねて（下）

富善 一敏・森脇 優紀

はしがき

「金井延とフェノロサ：史料紹介を兼ねて（上）」は『東京大学経済学部資料室年報』10号（2020年3月刊）に以下の内容で掲載した。

はじめに

- 1 金井延と金井資料について
- 2 史料の紹介
 - 2.1 「金井延日記」中のフェノロサ関係記事
 - 2.2 *Notes in Philosophy and Logic*

本11号ではこれを承け、下篇として次の内容

を掲載する。

2.3. *Notes in Philosophy and Logic* 訳注稿

3 掲載史料の解説と若干の考察

- 3.1 「哲学と論理学についてのノート」
- 3.2 フェノロサの授業と金井延
- 3.3 フェノロサの書画鑑定と金井延

むすびにかえて

また、2.1 については誤植や脱漏箇所が少なからず発見されたため、「補遺」として、再構成したものを掲載する（42-47頁）。

2.3 *Notes in Philosophy and Logic*（金井資料3:4/7/4）訳注稿

凡例

- *本訳注は、金井延が英語で書き留めたノート *Notes in Philosophy and Logic*（金井資料3:4/7/4）の日本語訳および注釈である。
- *本訳注の底本には、富善一敏「金井延とフェノロサ：史料紹介を兼ねて（上）」（『東京大学経済学部資料室年報』第10号、2020年3月）所掲の翻刻を用いた。
- *原文との対応については、原本に頁付がないため、原本の表紙、枚数及び表裏の大まかな位置を【 】で示した。
- *訳者が補った部分については [] で記した。

【表紙】

「哲学と論理学についてのノート N. Kanai.」

【1 枚目表】(2.2 写真 3)

“Law”という用語は2つの意味で用いられる。

I. 科学的な用法—一定不変なもの、または法則

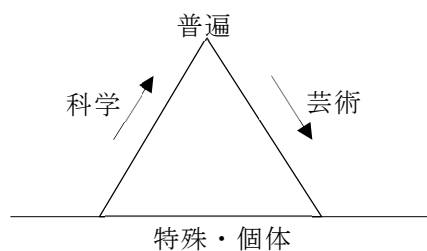
II. 法・掟・義務に関する意味

(A). 明確な上位者によって作られた

- (1), 神
- (2), 政治的支配者
- (3), 非政治的支配者 {家族/クラブ}
- (4), その人自身の良心 (純粋な道徳性)

(B). 明白に上位にある者によって作られない法—世論 (実定道徳)

芸術と [自然] 科学との違いは次の図に示されている。



論理学略史

論理学の痕跡は、古代インドの歴史に見出される。当時の議論の論法は【1 枚目裏】

以下のようなものである。

命題—丘が燃えさかっている。

理由—丘が煙を上げているがゆえに。

実例—煙を上げているものは燃えさかっている。

適用— [そしてそのように] 丘が煙を上げている。

結論—それ故に丘は燃えさかっている。

しかしながら、現代の論理学の真の歴史はギリシャに起源をもつ。

I. ゼノン [Zenon]、エレア学派 紀元前 500 年—「一元論」¹⁾

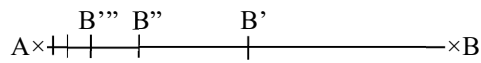
これはギリシャにおける最初の論理学者である。

彼の功績 [彼が生み出した論証の方法] は、

1. 「結論」
2. 「議論において [その結論における] 不審点を示す方法」
3. 「反証術 (知的な)」²⁾

である。

彼はまた、次の方法によって、運動や時間といったものは存在しないということを証明した。



- II. メガラのエウクレイデス [Eukleidēs o Megara] } キュニコス学派は、犬のような [暮らしをする]
アンティステネス [Antisthenēs]) } という意味である。
×かの有名なディオゲネス [Diogenēs] もこの学派
に含まれる。

アンティステネスは、自分の考えを表現できるもの全てを、名辞、命題、【2枚目表】三段論法という3つの役割に区分した。

III. アルキタス [Archytas] — 「カテゴリーに関する学説」

諸カテゴリーとは、認識の対象を分類することができ、それらを [命題の] 述語体系に整理することができる最高類である。「実体」という語はカテゴリーである。以下のものは、アリストテレス [Aristotelēs] のカテゴリーである。

1. Substantia (実体)
2. Quantum (量)
3. Quale (性質)
4. Ad aliquid (関係)
5. Ubi (場所)
6. Quando (時間)
7. Jacere (位置／状況)
8. Habere (所持)
9. Facere (能動)
10. Pati (受動)

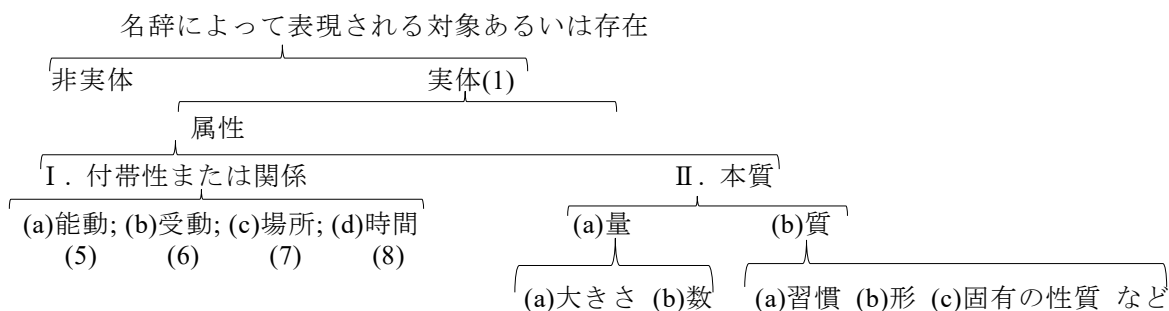
これらについて、

1. 実体＝物質的及び歴史的追究
2. 量＝数学
3. 性質＝医学

【2枚目裏】

4. 関係＝倫理学
5. 能動と量＝天文学、音楽、力学
6. 受動と能動＝電気学
7. 位置（場所）＝地理学
8. 時間（時代）＝年代学
9. 位置と性質＝彫刻
10. 位置と習慣＝絵画

私たちの精神に想起されるすべての観念は、以下の表のように分けられる。



IV. アリストテレス、科学としての論理学の創始者

- (1) 『オルガノン』 (2) 『命題論』
- (3) 『分析論』 (『詭弁論駁論』)

【3 枚目表】

V. (a) ガレノス [Galēnos] ([三段論法の] 第 4 格の発見者)

(b) アンモニオス [Ammōnios Sakkas]

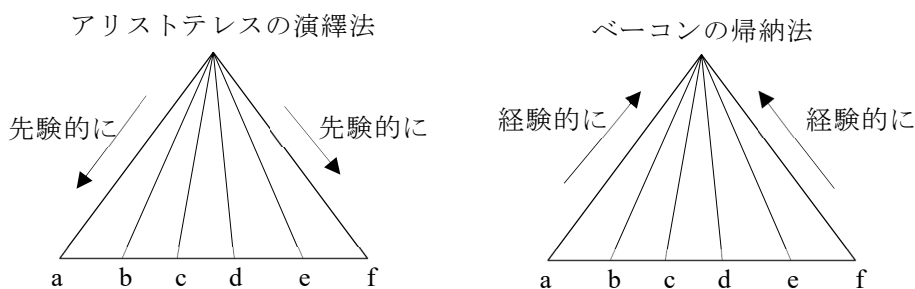
(c) アレクサンドロス [Alexandros (Aphrodisias)] とポルピュリオス [Porphyrios]

ポルピュリオスは付帯性を論じた³⁾。

VI. スコラ哲学者

VII. ベーコン [Francis Bacon]

『ノヴム・オルガヌム』



VIII. デカルト [René Descartes]、パスカル [Blaise Pascal] (その有名な「方法」⁴⁾)

最近の論理学に関する著者は—

ウェイトリー [Richard Whately]、ハミルトン [Sir William Hamilton]、トムソン [William Thomson]、ベイン⁵⁾、ミル [John Stuart Mill]、ベイン [Alexander Bain] (*Deductive & Inductive Logic*⁶⁾)、ジェヴォンズ [William Stanley Jevons] ⁷⁾、他

哲学

I. 全ての思考は比較である—

ベイン [Bain] は知性の本来の特性として以下を挙げる。

1. 相違または区別の認知

【3 枚目裏】

2. 一致または類似の認知
3. 記憶力または記憶

未開の原始的な国家では、[ものごとの] 区別が薄弱であった。ヨーロッパでさえ、200～300年前には科学における分類は非常に不完全であった。たとえば植物学の分類は、樹木、植物、灌木などであった。

II. 常識と科学の間の相違—

ジョン・フィスク [John Fiske] は以下の相違点を挙げる。

1. 定量的予知力
2. 科学によって検出・分類される類似性と非類似性との関係における懸隔の大きさ
3. 科学が分類するものの普遍性の度合い
4. 科学が定量化するものの抽象性 [の度合い]
5. 秩序化の度合いの高さ

【4 枚目表】

III. 哲学と科学における相違

スペンサー [Herbert Spencer] は科学と哲学の差異を以下のように指摘する。

「最も下等な知識は統合されていない知識である。科学は部分的に統合された知識である。哲学は完全に統合された知識である。」

ルーイス [George Henry Lewes] 氏は、神学、哲学、科学のそれぞれの側面を比較して述べる。

「神学、哲学、科学は、崇高な三本柱である。それぞれの権限は賢明に区別された。それらは様々な時代に非常に異なる重要な役割を担っていた。何世紀もの間、神学の優位性は絶対的であり議論の余地はなかった。その間に哲学は急速に発達し、ついに独自の地位を示すことが可能になった。そして、この2つのライバルが主権争いをしている間、科学は静かに、そして人目につかないように、独自の道を探っていた。」

【4 枚目裏】

「神学の役割は現在、哲学と科学のそれとは異なるものとして一般的に認識されている。……神学はそれ自体を信仰の領域に制限し、哲学と科学に探究の領域を委ねている。神学の主たる領域は、感情の領域である。その役割は我々の宗教的概念の体系化である。」

「科学の役割は全く異なる。それは、現象とみなされるものの秩序に関する我々の知識の体系化として定義されるだろう。」

「哲学の役割は、やはりそれらとは明らかに異なる。それは科学によって与えられた概念の体系化である。…科学が特殊性を通して到達した様々な一般法則を体系化するものであるように、哲学は一般法則の普遍性を体系化するものである。言い換えると、科学は認識と哲学に理論を提供するものである。」

[哲学研究の] 方法

哲学を研究するには2つの方法がある。【5 枚目表】1つは主観的、または形而上学的あるいは存在論的方法と、もう1つは客観的、または科学的あるいは実証的方法と呼ばれる。ルーイスは「真理とは何か」という問いに答えて [次のように] 述べる。

「真理は、観念の秩序と現象の秩序との一致であり、一方が他方を反映すること、つまり思考の展開は、ものごとの変化に続いて起こるということである。」そして、彼は「次のように」続けて述べる。

「I. 客観的方法は、各対象が感覚に働きかけるように、対象の変化を厳密に追跡することによって、現象世界に基づいて概念を形成するものである。それゆえに、思考の展開は、ものごとの変化と同期するのであろう。」

「II. 主観的方法は、概念に基づいて、現象世界を形成するものであり、ものごとの秩序を識別しようとするのである。それは、観念の秩序を、ものごとの秩序に段階的に適応させることによるのではなく、思考が先行することによるものなのである。その方向性は【5枚目裏】思考によって決定づけられるもので、対象によって左右されるものではない。」

2つの方法を比較してみよう。

I. プラトンについて、ルーイスは「[プラトンの]『ティマイオス』を開いてみよう」と言い、「我々は、森羅万象が魂をもった動物として生み出され、それが最良であったからだということを知る。生みだされたもの全ては、肉体を持ち、触れられるものであると同様に、目に見えるものでなくてはならない。[四元素の]火なくしては目に見えず、固体なくしては触れることができず、[四元素の]土なくしては固体は存在しないなど...数学者たちは5つの正多面体を発見し、もちろんプラトンは自身の「宇宙論」の中で大いに活用している。そのうちの4つは、四元素で表現し、土は正六面体、火は正四面体、水は正八面体、空気は正二十面体とした⁸⁾。残る5つ目の正十二面体は対応するものがなく、それゆえに、それは統一体としての宇宙に帰することとなった。...宇宙は、永遠不変に循環する魂を有している。【6枚目表】人間もまた魂を有するが、魂はその一部にすぎない。結果的には、その魂もまた循環している。[両者の]類似点をより完全なものとするために、人間の魂もまた、球体すなわち頭に収められている。しかし、神は、この頭が球体であることによって、丘を転がり落ち、険しい場所に上れなくなることを予見した。[そして]このことを避けるために、身体には、頭のために動く四肢が加えられたのである。」[と述べている。]

II. ヘーゲル [Georg Wilhelm Friedrich Hegel] によれば、生まれたばかりの子供の泣き声は「過酷な自然からの啓示を知らせている。」ヘーゲル学派の一人であるミヘレット [Karl Ludwig Michelet] によると、生まれたばかりの子供の泣き声は、「魂が自然の奴隷にされた時に感じる叫びを」示しているのである。

ヘーゲルの別の事例—「始まりは」とヘーゲルは述べ、「[それは]純粋な無ではなく、ものごとがそこから発現するという[意味の]無なのである。したがって、存在は、もとより、始まりに含まれているのである。【6枚目裏】始まりは、それゆえ、存在と無を含むのであり、それは両者の統一であり、—あるいは不統一であるか—存在は、同時に無なのである。」科学的手法の事例は...

「形而上学に対する正当な異議は、研究の主題に対するものではなく、むしろ研究の方法に対するものである。もし、その手法が正当であれば、その結果は正当化されるだろう。...偉大な知識人たちのかつての誇りと栄光は、今もなお価値ある文化の重要な要素をなしているが、現在の形而上学の墮落には、[形而上学に]対立する者の集団と同じく、わずかな信奉者の不満が結果として伴っているのである。今や、形而上学の大いなる可能性を信じる者はほとんどおらず、科学に向けられる情熱をそれに捧げる者はさらに少ない。形而上学がまさにその手法の本質によって、曲がりくねった迷宮の中に永遠に迷うように運命づけられたという確信は、日々強まっている。【7枚目表】その迷宮の取り囲まれた空間の中で、

疲れ切った探求者は、出口を見出せなかった先人の足跡を自分自身がたどっていることを、絶え間なく見出すのである。

.....

.....科学は、勢いを増してその発展にはずみをつけながら、[気づけば]年ごとに、ほとんど日進月歩ともいべき勢いで進歩している。各進化は、生物の発達における進化と同様に、機能的な優位性をもたらし、その優位性は、より高度な発展の動因となるのである。

社会論⁹⁾の講義*

我々が各文明国家の内部事情を調査するに、貧困者が余りにも多いことを目の当たりにするのは、非常に嘆かわしい現実である。実際に、文明が貧民を生み出す。—文明の進歩は、貧困者の減少に反比例するのである。この事実は、追加の調査によって十分に証明されている。

*本講義は、千頭 [清臣 (徳馬)] 氏が、第一学年 A クラスに行ったものである。

【7 枚目裏】 ベッグス [Beggs] 博士によると、その著作 *Social Architecture* の中で、[博士は]「グラスゴー市には 3 万戸の小さな住居があり、10 万人が住んでいる。各住居は、たった 1 部屋だけで、多くの場合窓が付いていない。」と述べており、さらに博士は「リバプールの人口密度は、ロンドンの 2 倍で、すなわち、3 万世帯・15 万人が、一部屋に住んでいるのである。そのうちの 15,000 戸は地階にあり、たいていは不潔で、暗く、そして、[他に] 挙げるとするならば、水はけがとても酷い。」と述べている。

この惨めな光景を仕上げるために必要なことは、農村の悲惨さをただ思い起こすだけである。そして、凝視するにはあまりにも悲しい情景を我々は目にするのである。タイムズの記者は、1874 年 5 月 25 日付、イプスウィッチ発信で記事を書き、惨めな農業労働者が住む小さな家の一部について述べている。メットフィールドでは、彼は、1 つの寝室に 9 つの寝台のある家 2 軒を確認している。ベギングフィールドでもやはり、1 つの寝室にもかかわらず 9 つの寝台がある 1 軒を、ワーリングワースでは、**【8 枚目表】**1 つの寝室に 8 つの寝台のある家 2 軒を、メイポール・グリーンでは、1 つの寝室に夫婦と少年 2 人、少女 4 人、そして幼児 1 人の寝台のある家 1 軒などを確認している。

パリに関して伝えられていることは、次の通りである。ルイ・ブラン [Louis Blanc] は、「パリ、[すなわち] 科学と芸術の都であり文明世界の中における煌びやかな首都は、その誇らしげな文明における忌まわしき明暗の全てを正確に見せている。非常に美しいプロムナードと泥だらけの通り、きらめく大商店と薄暗い作業場、歌劇場と泣きわめくための低俗な場所 [といった明暗を見せているのである]。そこには、最も恐ろしい忌まわしさと悲惨さが見出せる。[すなわち、それは] 無知によって悪徳を身に付け、欲望によって悪に陥った者、プロの泥棒や詐欺師・娼婦・ごろつき、6 万人以上の大勢の犯罪者、野蛮な外見に対する恐れから有害な言葉を吐く、品行方正な世の中における嫌われ者、野蛮な口喧嘩でしばしば血がワインに混じってしまうような乱痴気騒ぎの忌まわしさと悲惨さである。」と述べている。

【8 枚目裏】 世界は不完全である。なぜなら、パリ、ロンドンなどヨーロッパで最も文明化された都市でさえ、貧困が存在するからである。貧困の一時的な原因はいくつかあるが、我々は、その避けられない原因を調査するつもりである。最も広く流布している今日の考え方が、「進化論」であることは誰もが知っている。「生存競争」を理解するために、我々はまず初めに、生物の増殖について理解しなければなら

ない。

1つの植物は50の植物を生み出す。それから、

$$1 \times 50 = 50 \quad 1 \text{ 年目の終わり}$$

$$50 \times 50 = 2500 \quad 2 \text{ 年目の終わり}$$

… … …

… … …

$$\dots = 971,656,250,000,000 \quad 10 \text{ 年目の終わり}$$

このように生物は、等比数列的な比率で増殖するのであり、それには実例が当てはまるのである。

ネズミを例にすると、1組のつがい1年で12匹の子供を生み出す。計算は次の通りであろう。

【9枚目表】

つがい

$$1 \text{ つがい} \times 12 = 12 = \text{子}$$

$$12 + 2 \text{ (1 つがい)} = 14$$

しかしながら、現代の博物学者によると、1つの属にはおびただしい種があり、属はかなり多く存在するのである。それゆえ、仮に上述の等比数列的な増殖が実際に起こるならば、地球には数年のうちに生存空間がなくなってしまうだろう。したがって「生存競争」は、この生物世界において必要なのである。

地球の表面にある居住可能な部分は、

$$5100 \text{ 万平方マイル} =$$

$$1,421,798,400,000,000 \text{ 平方フィート}$$

現在、ハクスリー [Thomas Henry Huxley] によると、1つの植物には4平方フィートが必要である。しかし、生物の増殖の計算に従うと、上述のスペースでは、単一の植物であっても不十分なのである。では、生物の数多くの属、各属に含まれるあらゆる種、【9枚目裏】そして各種に含まれるおびただしい数の固体から成り立つ世界の結末は、一体どのようなものなのだろうか？

理性を持たない存在だけではなく、理性を持つ人間もまた、等比数列的に増殖するが、増殖の度合いは異なるのである。これは統計によって真実であることが明白に証明されている。マルサス [Thomas Robert Malthus] の統計学によると、ほとんどの国の人口は25年で倍増する。

しかし実際の観点からすると、増殖は、抑制がかかるために等比数列的にはならない。

増加率を抑制する条件はさまざまである。[それらを]できるだけ簡単に分類すると、次のようになる。

I. 気候条件、どちらかと言えば、気象学上の条件。それは、大気あるいは水の平均温度だけではなく、季節による極端な寒暖、【10枚目表】異なった時間における日射量、快晴と雨の日数、氷や雪の量、風向きと風速、気圧と [大気中の] 電気現象、土壌の性質、海拔などからなる。

II. 生息地。すなわち、気候によって定められた場所、動植物が生息し、成長する特定の場所を意味する。例えば、トラやライオンなどの生息地は森に、鳥の生息地は森の木々に、魚は川に、サメやクジラは海に、へびや爬虫類などは穴ぐらに生息する。

III. 食物。この場合には、動植物の生存手段を意味する。

IV. 固有の性質—すなわち、非常に多数存在する現代の動植物の器官、習性、食べ物、生まれつきの傾

向などに関する意味

【10 枚目裏】

- (1) 敵対者 { (a)天敵、いわゆる直接的敵対者
(b)競争相手、いわゆる間接的敵対者
- (2) 協力者 { (a) 直接的
(b) 間接的

したがって、等比数列表的增加が当てはまるのだが、動物の生存においては、人間の生存も当然含め、上述の諸条件を満たさなければならない。ゆえに、これらの条件を満たさないものは死ぬ運命にあり、満たすものが生き残るのである。種内競争は、最も熾烈なものである。生存競争は、至る所に存在するのである。

これらの問題に対する解答は、動物界と植物界の至る所で実際に見出せるだろう。すなわち、自然界は、生命の種をとめどなく、そして惜しみなくあちこちに蒔いてきたが、発育するために必要な場所と栄養は、いくぶん乏しかったのである。この高い割合の増加を引き出す様々な環境が原因ではなかったが、世界中では、【11 枚目表】ヘビやネズミなどが過剰増殖して久しいのである。しかし実際は、この高い割合の増加を抑制する様々な影響が作用しているのである。植物の 1,000 粒の種、あるいは 1,000 匹の動物の子のうち、その 999 粒・匹は十分に成長する前に死んでしまうと言われている。言い換えれば、自然界の全ての生物の間では、あらゆる時に、あらゆる場所で、過酷な競争が繰り広げられているはずである。仮に 9...¹⁰匹のヘビや 9...本の植物が [生き残って] 地球上を埋め尽くしたら何が起こるのかをちょっと想像してみよう！ 10...匹のサメが海を埋め尽くしたとしたら、何が起るのかを想像してみよう。我々は、殺戮が、自然界の至るところで、絶え間なく、いかにけた外れに続けられているのかを、おぼろげに悟るのである。なるほど確かに、この世界は、至る所に存在する生存競争の劇場であり、絶え間ない戦争—それはワートルローの戦いよりも激しいもの—なのである...。これは、偶発的な原因—継承問題や陰謀、あるいは野心的なナポレオンの争いのようなもの—から生じたものでなく、【11 枚目裏】自然界全体における場所と生物の極端な数の不均衡から生じたものである。

動物が、天敵から逃れるための様々な方法がある。これらの方法は、自然界より授けられたものである。すなわち、

I. 特定の独特な色で動物が自身の身を守るための保護色

II. 擬態。南アメリカには、ヘリコニダエと呼ばれる蝶の一種がいる。それは、実に不快なおいを分泌することで、鳥に捕獲されない。ある蝶はこのことを利用し、縞模様や色合いを [ヘリコニダエに] 非常によく似せているため、両者はほとんど識別できない。ウォーレス [Alfred Russel Wallace] は [次のように] 述べる。「熱帯地方では、夜行性の数千種の昆虫がおり、枯れ木あるいは倒木の皮をカリカリかじる。その体の大部分には、【12 枚目表】灰色と茶色の繊細なまだら模様になっているが、それは対照的に配置され無限に変化しており、その上、樹皮の色と完全に溶け込んでいるため、2~3 フィート離れると、全く区別ができない。」ある昆虫は、枯れ木の枝に似ている。擬態のその他の事例は、ジャコウネズミの例があげられる。オーデュボン [John James Audubon] は、ジャコウネズミを土の塊とよく間違えたと言っている。それほどまでに、この上なく似ていたのである。さらにまた、この事例は魚にも当てはまる。赤みを帯びた糸状の突起を持つ魚は、尾を海藻に絡み付けると、海藻とほとんど区別がつかない。

このことから、自然選択は避けられないものだが、非自然的選択は個体それぞれの意志によるものであることから、保護色や擬態が非自然的選択であることを、我々は容易に理解できるのである。

自然選択はあらゆるものごとに適用できる。【12 枚目裏】国家と個人は、自然選択によって進歩する。一般的に言えば、最も強いものが生き残るのである。未開人が発展することは、ただ力によって決まるのである。では、自然選択の事例は一体どのようなものだろうか。それは次のように説明される。

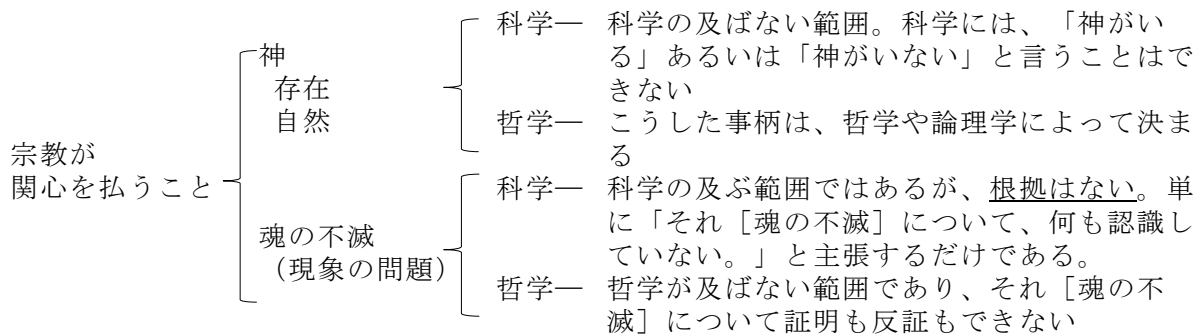
「要するに、あらゆる瞬間に、地球上のあらゆる場所で、生存競争は、あらゆる生命体、動植物の間で繰り広げられているのである。競争においては、全てのものに生き残る機会があるわけではなく、弱者や適応力が劣るものは〔競争に〕屈し、一方で強者と適応力に優れたものは、競争に生き残り繁殖するのである。...

周囲の状況に最も調和している生き物は、日々、絶えず、調和できないものよりも優位な立場につけるのである。すなわち調和できるものは、調和できないものが死ぬ一方で生き長らえ、調和できないものが衰退する一方で繁栄し、他の命を奪うことで、〔生存競争を〕耐え抜いていくのである。例えば、〔生き物は、生存競争の中で〕餌を見つけ、獲物を捕らえ、敵から逃れて生き延びていくわけだが、より弱く、鈍く、【13 枚目表】判断力のない盲目的な仲間、飢え死にしてしまう。したがって、各種族の中で最もすぐれ、強く、素早く、健康で、利口で、勇ましいもの—生命力に溢れているもの—が、長く生き長らえ、最も良いものを食べ、相手選びの戦いに打ち勝つのである。これらの強みによって、—彼ら〔優位にあるもの〕は当然切望するであろうが—彼らとその種族の祖先となるのである。より劣ったもの—病弱なもの、愚かなもの、欠陥のあるもの、弱いもの—は、死んで、滅びてしまい、獲物からは引き離され、闘いに敗れ、自分に合うメスを見出すことができないのである。」

これが、自然選択である。これからは、私が社会論について話そう。これは、最初にはっきりしないものであるが、自然選択と非常に関連しているのである。

【13 枚目裏】 フェノロサ教授—

科学が突きとめるべき事柄というものは、ある特定の空間における明確な因果関係の問題—特定の現象への還元—なのである。時間の始まりあるいは空間の範囲といった問いは、哲学的であるが、科学において知覚できるものではない。



3 掲載史料の解説と若干の考察

3.1 「哲学と論理学についてのノート」

ここでは、2.3 に掲げた「哲学と論理学についてのノート」(Notes in Philosophy and Logic) について、「金井延日記」¹¹⁾を基に若干の考察を試みる。

ノートは、おおよそ下記の内容で構成されている。

- ・ Law の意味の説明 [ノート 1 枚目表]
- ・ 論理学略史 [ノート 1 枚目表～3 枚目表]
- ・ 哲学に関する内容：哲学・科学・神学の役割、哲学研究の手法（プラトン、ヘーゲルの事例） [ノート 3 枚目表～7 枚目表]
- ・ 千頭清臣¹²⁾の社会論（Socialism）の講義メモ [ノート 7 枚目表～13 枚目表]
- ・ 神と魂の不滅に対する、科学と哲学が関与しうる範囲を図示したもの（フェノロサによる解説） [ノート 13 枚目裏]

このノートには、記録した日付が見られず、金井がいつこのノートを作成したのかは明確ではないが、実際に金井がフェノロサの講義を受講し始めたのは、金井が東京大学文学部 1 年生であった明治 14 年度（明治 14 年 9 月～同 15 年 6 月）である。なおフェノロサは、この年度には、論理学（1 年）、哲学史（2 年）、理財学（3・4 年）を担当していた¹³⁾。「金井延日記」にある明治 14 年度の講義関係記事から、当該年度の講義を概観し、ノートと講義との関連性について言及する。

明治 14 年（1881）12 月 1 日条に「数十年前豫備門第一級理財學科終、教師千頭氏約一級甲（A）^{ソシヤリズム}（議）組以為社會論講儀、予隱聽之欲聽之而、此日第二時間無課業、乃行千頭氏室、與該組聽氏講演」とある。ここから予備門教師の千頭が行った社会論の授業を、大学 1 年生の金井が傍聴したことが分かる。本節冒頭で述べたように、この講義の具体的な内容がこのノートに記されている。

明治 15 年 2 月 18 日条には、「於千頭氏教室、從フェネロサ先生學思想之法 (Laws of Thoughts)」

とあり、フェノロサの講義が千頭清臣の講義と関連して行われたことが分かる。上述の通り、ノートの冒頭には、「Law」の意味についての解説が記されており、これは「思想之法」をフェノロサが講義する際に、その前提として「Law」の用語の定義を行ったことを示していると解釈できる。おそらく、このノートも、この時のフェノロサの講義内容を基に記録されたのであろう。

ただし、ノートの構成と日記にある講義の順序を対照させてみると、矛盾が見られる。もし、このノートが、授業中に作成されたものであるとするならば、千頭の授業に関するメモが「Law」に関する記述よりも先にくるはずである。また、ノート全体の字体が一続きであることから、金井が、自身の理解を助けるために千頭の講義ノート¹⁴⁾から後に抜き書きした可能性が高いと考えられる。

2 月 18 日の授業の後、フェノロサの病気などにより、論理学の授業はしばらく行われなかったようである。実際に論理学の授業が始まったのは 3 月 8 日である。金井は「フェネロサ氏論理學自此日始、此課也不用課業書、唯因氏之講義耳、氏得妙於講義、余此日初聽之大驚、蓋此課業法理文三學部一年生皆為一組聽講義也、故級甚大矣、フェネロサ氏大驚多數」と記す。

この記述からは、フェノロサは講義で教科書を用いなかったが¹⁵⁾、金井はその内容が妙を得たものと大いに驚いたこと、本授業は法・理・文の三学部生の共通の履修科目であったため、フェノロサが受講者数の多さに驚いたことが分かる。

3 月 22 日の日記によると、第二学期（1～3 月）のフェノロサの論理学試験は行われなかった。

フェノロサの授業は第 3 学期の 6 月 10 日まで続けられた。彼の講義報告によると、「然レトモ論理学ニ至リテハ学生ノ要需ニ応シ第三学期ヲ通シテ休暇ナク講義ニ従事シタリシモ遂ニ其篇ヲ完結スルニ至ラサリキ」¹⁶⁾と、予定していた内

容を全て終えることはできなかつたらしい。

6月26日には千頭の論理学授業と共に試験を行っている。次に掲げるのは、金井資料中に現存するその試験問題¹⁷⁾である(写真1)。これは、金井が試験問題文を写したものであり、上部には、「English (by Prof. Toyama)」として外山正一の英語の試験問題があり、フェノロサの試験問題の下には、「II. Formal Logic (by Mr. Chikami). (This is in print).」として千頭の論理学試験問題が続く。

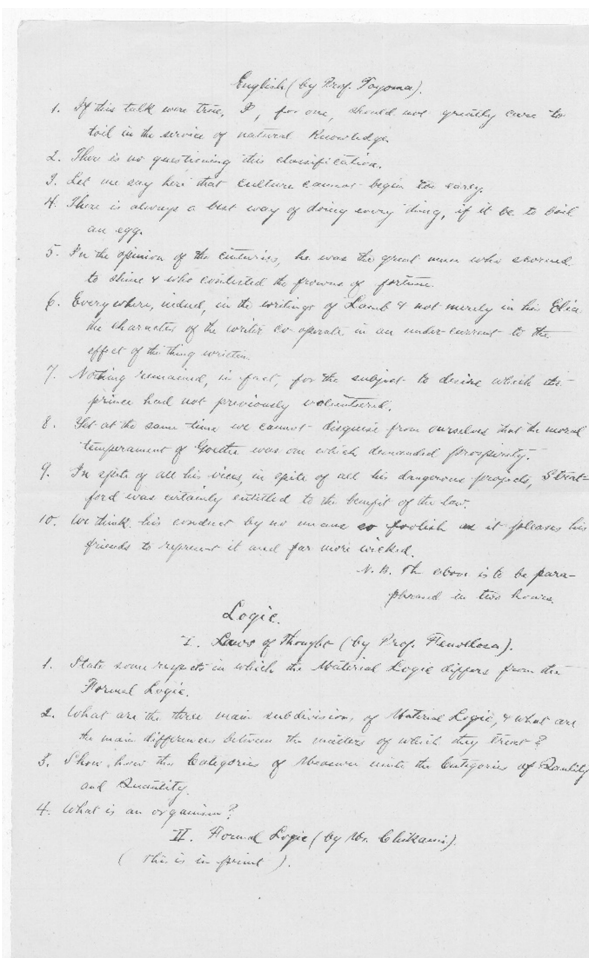


写真1 フェノロサの論理学試験問題

(原文)

Logic.

I. Laws of Thought (by Prof. Fenollosa)

1. State some respects in which the Material Logic differs from the Formal Logic.
2. What are the three main subdivision of Material

Logic, & what are the main differences between the matters of which they treat?

3. Show how the Categories of Measure unite the Categories of Quality and Quantity.

4. What is an organism?

(訳文)

論理学

I. 思考の法則 (フェノロサ教授による)

1. 実質的論理学が形式論理学と異なる点を述べよ。
2. 実質的論理学における3つの主要な区分とは何か、またそれらが扱う内容〔問題〕における主な違いは何か。
3. 判断のカテゴリーが質と量のカテゴリーをどのように統合するかを明らかにせよ。
4. 有機体〔論〕とは何か。

この試験問題の内容を見る限り、Notes in Philosophy and Logicに記された内容との直接的な関連性は見出せない。また、秋山ひさ氏が発見した金井によるフェノロサの講義ノート Lectures on Logic (1882年3月?日~?月13日)は、本ノートとは内容が異なり、明治15年3月から始まっていることから¹⁸⁾、Notes in Philosophy and Logicは3月に行われた講義内容に基づいていない可能性が十分に考えられる。なお、秋山氏が言及したLectures on Logicと試験問題が対応する可能性については、後考に俟ちたい。

以上のように、「金井延日記」には、講義の具体的な内容は記録されていないこと、また本稿で紹介したNotes in Philosophy and Logicの内容と実際の試験問題の内容との明確な関連性が見られないことから、このノートが明治14年度の講義の内容全てを網羅していたわけではないと考えられる。しかし、先に指摘したように、「Law」の定義や千頭の講義のメモがあることから、このノートが、千頭の講義とその後の2月18日に実施されたフェノロサの講義の内容を基にして、金井自

身の理解を助けるために整理してまとめ直したものである可能性が考えられる。

本節の最後に、金井の試験結果について述べておく。金井はこの試験に合格した。明治15年7月8日付けの金井の文学部第一年修了証書¹⁹⁾には、「論理学 東京大学文学部教師 E. F. Fenollosa」のサインが、「論理学 東京大学文学部准講師 千頭清臣」と並んで記されている（写真2）。

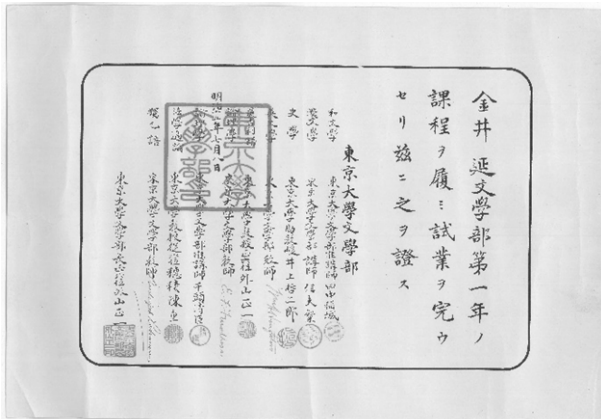


写真2 金井延の東京大学文学部1年生修了証書

3.2 フェノロサの授業と金井延

ここでは、「金井延日記」中のフェノロサの授業関係記事を紹介したい。

金井とフェノロサの出会いは、明治13年(1880)2月6日に、金井が明治7年に小野梓らによって設立された政治的啓蒙言論結社である共存同衆の英語討論会に出席した時である。金井は当時大学予備門の最上級生であり、初めて英語で5分間位演説したが、その出席者の中に「フェネロサ」がいた。

明治14年の記事は3.1で取り上げたので省略する。

明治15年度に金井は大学2年生であり、フェノロサは論理学(1年)、哲学史(2年)、理財学(3・4年)を担当した。金井は明治15年9月21日から哲学史の講義の聴講をフェノロサに願い出て許可されたが、講義の内容は1年次から継続の世態学(社会学)であった²⁰⁾。哲学史の講義は

11月30日から始まっている。その講義内容は、「第二年級ノ哲学ハ前年ニ於ケル如ク第一学期ニ於テ授クル世態学総論ノ講義ヲ包含スルモノナリ。然ルニ本学年ニ至リ従前ノ授業時間二時ヲ改メテ三時トセシヲ以テ世態学ニ次デ教導スル所ノ近世哲学史ノ講義ヲ従前ニ比スレハ大ニ増加シ得タルニ由リ該講義ヲ完了シ更ニ^{カント}韓図ノ哲学ヲ周密ニ考究セシムルニ至レリ」²¹⁾であった。

金井資料中には、「韓図氏哲学」と墨書された縦23.5 cm×横14.5 cmの鉛筆書きのノートがあり、2月23日の第18回から5月18日の41回に至るまでの講義内容を16丁の冊子に記している²²⁾。「金井延日記」の明治16年3月14日条から、フェノロサが教科書にした「カント氏純理論」を4年生の三宅雄二郎(雪嶺)の名義で図書館から借用していることが分かるので、この時の講義ノートである可能性がある²³⁾。

しかしながら、金井は文学部第二科(政治学・理財学科)に所属したため、明治15年秋から新たに統計学の講義を担当したドイツ人のカール・ラートゲンが正課であり、同第一科(哲学科)に属する哲学史の講義と重複した場合は正課を優先せざるをえなかった²⁴⁾。明治15年9月29日に金井はこれを歎いているが、第3学期に至り金曜3限のラートゲンの講義がないため、ようやく出席することが可能になった。しかし今度は^{しのぶ}信夫^{じょけん}怨軒の漢文の講義と重なり、明治16年4月13日条にあるように、フェノロサと信夫の両方の講義時間を移動することで聴講が可能になった。この他にも、明治16年1月16日にはフェノロサの土曜2限の哲学科の授業と外山正一の世態学の授業が重複したが、外山に頼みその授業を土曜3限に移動してもらっている。金井のフェノロサの受講の熱意が偲ばれるが、当時の文学部の学生数が少なく、学生の願いによる授業時間の移動が可能であったことも指摘しておきたい²⁵⁾。

明治16年度も、フェノロサは論理学(1年)、

哲学史(2年)、理財学(3・4年)を担当した。金井は大学3年生であり、哲学史と理財学の両方の授業に出席した。前者ではヘーゲルの論理学が講じられたが未完に終わり、明治17年6月16日条にあるように百枚余りを残し、翌年度に持ち越された。同年5月27日には試験が行われた。後者では明治16年10月12日条にあるように、ジョン・スチュアート・ミル(「彌爾」)とジョン・エリオット・ケアンズ(「ケヤーンズ」)の理財書が用いられたようである。また理財学の試験問題として、「貨物ノ需要ヲ論セヨ」(明治16年12月6日)、「資本増加ヲ論ズ」(同年12月13日)が出題されている。また明治17年1月24日には「地賃論」をテーマとして学生に論文を作成させ、それを「エキサーサイズ」(exercise、練習問題)と称したことが知られる。

明治17年度のフェノロサの授業は論理学(1年)、哲学史(2年)、哲学(3・4年)であった。金井は大学4年生であり、哲学のうち木曜日1限の授業に出席した。2限も哲学の授業だったが、横田國臣の治罪法の授業と重なるため、明治17年10月2日の初回を除き出席できなかった。明治18年2月19日に横田が授業時間を木曜日の1・2限に変更したため、フェノロサに木曜日1限の授業を金曜日の4限に変更することを願い認められた。2月26日にはヘーゲルの論理哲学の講義が、1年間をかけてようやく終了した。3月3日からはフェノロサによる応用哲学の講義が始まっている。金井資料中に *Lectures on Applied Philosophy* と題された縦20.5 cm×横16.5 cmのノートがあり²⁶⁾、ペン書きで4枚が記されており、この応用哲学の5~8回目の講義ノートと考えられる²⁷⁾。

3.3 フェノロサの書画鑑定と金井延

フェノロサが来日後日本美術に関心を持ち、岡倉天心と共にその再評価と紹介に努めたことは

よく知られている。「金井延日記」には彼が行った書画の鑑定記事が2件あり、以下紹介したい。

最初の記事は明治17年(1884)4月30日である。この日、金井は麹町の父金井道恭宅を訪れたが、遠州親睦会²⁸⁾員の古田新六がフェノロサに古画の鑑定を依頼したいとの意向を、知人の加藤鼎三を通して書簡で問い合わせてきたことを知らされた。金井は「フェノロサ余教師也」とこれに応じ、5月15日にはフェノロサの通訳を務めていた同級生の宮岡恒次郎に手紙で相談したようである。

5月18日に金井は古田新六と会って絵画鑑定のことを相談し、22日に金井がフェノロサに古画鑑定を依頼しその許可を得て、24日土曜日の午後2時にフェノロサの自宅を訪問することを取り決めた。翌23日には古田に葉書を送り訪問の日時を伝え、宮岡恒次郎に会って「西洋人應對之事」を相談している。西洋人であるフェノロサを訪問する際のマナーのことであろうか。

5月24日の午後1時半に古田新六が神田の大学寄宿舎を訪れ、金井と共に門前から人力車に乗り本郷の文部省用地内にあるフェノロサの宿舎を訪れ、フェノロサに古画の鑑定を行ってもらった。古田が持参した画とフェノロサが所持していた画が同じ図であることが分かり、その奇遇に驚いている。3時に辞去し、古田とは赤門前で別れた。

第二の記事は明治18年2月10日である。この日漢画南宗派の画家加藤江村²⁹⁾から金井に、フェノロサに書画鑑定を依頼してほしいとの書簡があった。12日に金井はフェノロサに相談し、翌日か翌々日に来訪されたいとのフェノロサの意向を加藤に返信した。加藤は翌13日の午後2時半にフェノロサ方に赴き書画を鑑定してもらい、金井は「通辨」(通訳)を務め、午後4時に辞去している。14日に加藤から往復葉書が届き、20日に返事を出している。

この2つの記事から、フェノロサが東京大学の教え子である金井の依頼に応じて書画の鑑定を行っていたこと、金井が紹介者や通訳として関与していたことが分かる。

むすびにかえて

以上前号と本号の2回にわたり、東京大学経済学部資料室架蔵の金井資料のうち、「金井延日記」中の関連記事と *Notes in Philosophy and Logic* を翻刻し、金井延とフェノロサとの関係について若干の考察を行ってきた。最後に、東京大学卒業後の金井がフェノロサをどう見ていたかについて述べたい。

金井はフェノロサについて、昭和4年（1929、当時54歳）に次のように回想している³⁰。

歴史学派は東京帝国大学の文科大学の中に植ゑ付けられた。自由主義が慶應義塾を中心としたとすれば、之と反対な思想は帝大から頭を擡げたのである。当時まだ法科大学が文科から独立しない時で、文科大学に招聘された外国教師から影響を与えられたやうに思ふ。明治十二三年頃に教師として迎へられた米人にフェノロサ（Fenollosa）と云ふのがゐた。氏名からみて南欧の系統らしく思はれるが、此の人は外国語教科書を講読する時に、ミルの“On Liberty”とスペンサーの“Social Statics”“Sociology”を使つた。此の点から云ふと正統学派に属し自由主義的な人ではあつたが、不思議に此の人にヘーゲルの思想が混じつてゐた。ヘーゲルとミルやスペンサーとがどう調和したのかはよく分からないし、ヘーゲルの思想をどう云ふ風に鼓吹したのかも、今よくは覚えてゐないが、フェノロサによつてヘーゲルが説かれたこと丈はハツキリと記憶が残てゐる。

金井はミルとスペンサーが教科書として取り上げられたことを挙げ、ヘーゲルがフェノロサに

よつて教えられたことを特筆している。*Notes in Philosophy and Logic* にもヘーゲルが引用されており、金井が熱心に勉強したヘーゲルを初めとする哲学が、彼の思想形成にいかなる影響を与えたかについて、今後検討する必要がある。

また、金井は明治19年（1886）7月に文部省留学生としてドイツ及びイギリスに留学する。金井は同年9月にハイデルベルクから濱尾新に送った書簡で、

出発前森文部^{（ママ、以下同）}太^{（ママ、以下同）}臣ニ親シク面語致候
処、全太臣ヨリ特別ニ貴下ヘノ伝言ヲ委托サ
レ候、其ハ別義ニ無之候得共、当今日本ニテ
音楽・絵画等ニ関シ美術上頗ル重大ナル問題
相起リ、之ガ進歩改良ヲ謀カルノ必要ハ日ヲ
追フテ益々切ナルノ勢アレバ、文部省ヨリハ
近々フェノロサ氏并ニ岡倉覺藏氏ヲ欧州ヘ
派遣スルノ目論見アリ、其レニ付欧州ニテ美
術現今ノ景況并ニ其ノ教育ニ関スル行政上
ノ要務等取調ノ義ヲ貴下ヘ依頼申シ度シト
ノ事ニ御座候也、尤モ此事ニ付テハ何ツレ公
然タル命令ノ下ダレコトナルベケレトモ、殊
更ラニ野生ヲ以テ予メ御報知申置クハ、太臣
ノ熱心ヲ御告ケ申スマデニ有之候トノ事ナ
リ、而シテ此事ヲ取調ルニ尚ホ許多ノ時日ヲ
要サバ、欧州御滞在ノ日限ヲ延ハシ候テモ宜
シト申サレ候

と記している³¹。明治19年8月に東京大学から文部省に転任したフェノロサと岡倉天心の欧州派遣に際し、前年の明治18年12月から教育事情視察のため渡欧中であった文部省参事官の濱尾新に美術の景況と教育行政要務の取り調べを依頼する文部大臣森有礼の言を伝えたものであるが、留学中の「金井延日記」にはそれ以外フェノロサに関する記事がみられない。金井にとってフェノロサはあくまで大学在学中の教師であり、フェノロサが日本美術に研究の焦点を移したこともあり、大学卒業後はフェノロサへの関心がなく

なつたと考えておきたい³²⁾。

金井資料及び「金井延日記」は、前号でも述べたが、東京大学における経済学の発展と経済学部の歩みを示す貴重な一次資料である。筆者は「金井延日記」の翻刻作業を行いつつ、今後も新たな事実や論点の発掘に努めたいと思う³³⁾。

【付記】本稿は、2.3 *Notes in Philosophy and Logic* 訳注稿を森脇優紀が、3.1「哲学と論理学について

のノート」を森脇及び富善一敏が、その他の部分を富善が執筆した。論旨及び全体については富善がその責を負うものである。

(とみぜん かずとし：東京大学経済学部資料室
学術支援専門職員)

(もりわき ゆき：東京大学大学院経済学研究科
特任助教)

- 1) 一元論とは、世界に真に実在するものはただ一つであるとする立場をいう。西洋哲学史においては、エレア学派の Parmenides が最初に明確に唱えたとされる。Parmenides によると、真の実在は不生不滅・不変不動な唯一のものでなくてはならないという。Parmenides のこの結論は、弟子のエレアのゼノンによって補強された。
- 2) ゼノンは、ある主張から矛盾を引き出すことによって、それが不合理であることを示すという弁証法を用いた。この論法を用いることで、ゼノンは、多数のもののパラドックスや、「アキレスと亀」の話として知られる運動のパラドックスを主張した。
- 3) ポルピュリオスは、著書『エイサゴゲー』（『入門書』）において、アリストテレス論理学における「類」・「種」・「種差」・「特性」・「付帯性」について解説している。
- 4) パスカルの原理を指すか。
- 5) 原文では Bayne とある。Bain とは別人物か。
- 6) 原タイトルは、*Logic : Deductive and Inductive* である。
- 7) 原文では Jevon となっているが、Jevons を指すと思われる。
- 8) 正しくは、水は正二十面体、空気は正八面体に対応する。
- 9) 「金井延日記」のうち明治 14 年の「蟠龍日記 附会計表」（金井資料 4:6/15/8）の中に「社会論」とあり、そこに「ソシヤリズム」とルビが付されていることから、原文の”Socialism”を「社会論」と訳出した。富善一敏「金井延とフェノロサ：史料紹介を兼ねて（上）」『東京大学経済学部資料室年報』第 10 号、2020 年 3 月、67 頁。
- 10) 原本には、「9 etc.」と記されている。一方、この一文の前では、「植物の 1,000 粒の種、あるいは 1,000 匹の動物の子のうち、その 999 粒・匹」とあるように、具体的な数字で示し、その比率が分かりやすいように表現されている。訳者は、この一文では、数が限りなく続いていることを示すために、具体的な数字は数字を示さずに「9 etc.」として表現したのではないかと推察した。そこで本稿では、「9...」と訳出することとした。以下の「9 etc.」と「10 etc.」についても同様に表現した。
- 11) 以下「金井延日記」については出典を略す。本号掲載の富善一敏「金井延とフェノロサ：史料紹介を兼ねて（補遺）」に掲載した翻刻を参照されたい。
- 12) 千頭清臣（徳馬、1856～1916）は高知県土族であり、明治 13 年（1880）に東京大学文学部を卒業し、翌 14 年からは東京大学予備門教諭に就任し、論理学を講じた。後内務官僚となり、栃木・宮城など各県の知事を歴任し、明治 40 年（1907）には貴族院議員に任じられている。金井は千頭と親しかったようであり、「金井延日記」には千頭の名前が頻出する。明治 16 年 4 月に千頭は野々山茂に替わり金井の副保証人になり、明治 17 年 9 月 12 日付けで東京大学総理加藤弘之に提出された金井の下宿願書には千頭が副保証人として奥印した（金井資料 1:1/7/25/4）。明治 19 年 1 月の千頭のイギリス留学に際し、金井はその洋行送別会の世話人を務めている。
- 13) 杉原四郎「フェノロサの東京大学講義：阪谷芳郎の筆記ノートを中心として」『季刊社会思想』第 2 巻第 4 号、1973 年 2 月、191 頁。
- 14) 千頭の講義ノートの現物は、現時点では確認されていない。
- 15) もっともフェノロサ自身は明治 14 年度の講義概要（現在のシラバスに相当）で「論理学ハ凡百ノ学術研究ノ為ニ最モ緊要ノ関係ヲ有スルヲ以テ法理文学部共ニ其第一年ニ於テ各自専修ノ科目ノ外特ニ該課目ヲ教導ス教科書 ジェボンズ氏論理学 エヴェレット氏著論理学」と記しており（山口静一編『フェノロサ社会論集』思文閣出版、2000 年、63 頁）、教科書を使用したかどうかは定かではない。
- 16) 前注 15 山口静一編『フェノロサ社会論集』67 頁。
- 17) 金井資料 3:9/3/17。

- 18) アーネスト・F・フェノロサ講述／金井延筆記、秋山ひさ編・解説『フェノロサの社会学講義』神戸女学院大学研究所、1982年、104頁。
- 19) 金井資料 3:7/2。
- 20) この講義ノートが、秋山ひさ氏が翻刻した社会学講義ノート（1882年9月21日～11月17日 Lectures on Sociology）に相当すると考えられる。前注18参照。
- 21) 「明治十五年度 講義報告」、前注15『フェノロサ社会論集』67頁。
- 22) 金井資料 2:3/5/14。
- 23) 秋山ひさ氏によると、金井が記したフェノロサの哲学史の講義ノート（*History of Philosophy*）は、明治15年12月8日から翌16年2月20日の17回の講義のものであり、本「韓図氏哲学」がその後の講義ノートである可能性が高い。前注18参照。
- 24) 「金井延日記」明治15年11月13日条に記された時間割によると、金井は世態学の授業を週3回聴講しているが、そのうち正規に履修できたのは木曜日の1限のみであり、木曜日の2限と土曜日の2限は専修ではなく、課外授業として傍聴していた。
- 25) 明治15年度の東京大学文学部の在籍者数は、1年5名、2年7名、3年15名、4年10名であった（山口静一『フェノロサ：日本文化の宣揚に捧げた一生』上巻、三省堂、1982年、44頁）。
- 26) 金井資料 1:5/3/5。なおこのノートの後半は金井のドイツ留学中の講義ノートであり、ドイツ語で記されている。
- 27) 秋山ひさ氏によると、明治18年の *Applied Philosophy* のノートがあり、このノートと関連すると考えられる。前注18参照。
- 28) 遠州親睦会は金井が生まれた旧遠江国（現静岡県）出身の在東京学生の親睦団体であり、金井が幹事を務めていたことが「金井延日記」から分かる。
- 29) 加藤江村について、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所の「明治大正期書画家番付データベース」（https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke_name/724846.html）で検索した結果、明治16年4月2日「明治一五年絵画共進会出品画家々名一覧_806931」に「東京 加藤江村」、明治18年2月23日「大日本儒詩書画一覧_806941」に「大坂 加藤江村」、明治22年「書画集覧 次第不同_807141」に「タンゴ丁 加藤江村」の名を見出すことができた（2021年3月3日閲覧）が、その他の詳細は不明である。
- 30) 『経済往来』4-2、1929年、20頁。なお旧漢字は常用漢字に直した。
- 31) 金井資料 4:6/24/3。引用に当たっては原則として常用漢字を使用し、適宜読点（、）及び並列点（・）を付した。アンダーラインは原文に付されていた。なおフェノロサと岡倉天心の欧州派遣の詳細については、前注25山口書、317～338頁を参照されたい。
- 32) 留学以降の「金井延日記」に、フェノロサに関する記述は現在のところ確認できていない。
- 33) 金井が東京大学で講じた経済学及び社会政策学の評価及び位置付けについては、小野塚知二「東京帝国大学経済学部の創立と社会政策学」『大原社会問題研究所雑誌』734号、2019年12月、など多くの研究がある。